
クテュルフ神話と少女と剣

将軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クテュルフ神話と少女と剣

【Nコード】

N1605P

【作者名】

將軍

【あらすじ】

古来より、『人ならざる者』の側に立ち、彼らを守ってきた通称『護り屋』一族の1つ『古門家』の長男『古門 護』はある日突然

川辺で倒れていた少女に助けを求められる。

彼女は、自分が『人ならざる者』であることを告げ、助けを求める。護はそれをひきつけるが、それは世界を巻き込む騒乱の始まりに過ぎなかった……

最1話 古門家の日常と深淵からの逃亡者（前書き）

お久しぶりです・・・といつてもここで始めたのぞかれた方もいるかも知れませんが。

あたらしいシリーズを始めさせていただきます。

なにしろ駄文ですので、読みづらい部分が多々あると思いますが、どうかご容赦ください。

なにか、気になる点がありましたら、遠慮せずにコメントしてください。

最1話 古門家の日常と深淵からの逃亡者

「というように、わしらの一族は古くから、おのれの信念に従い戦い続けた名譽ある一族ある……って聞いておるのか護！」護り屋一族『古門家』の首領、古門正造は目の前で、座りながら眠りかけている孫をしかりつけた。

「だって、じいちゃん。この話は幼稚園の頃から聞かされているから、いい加減覚えてるって……それに過去の一族がどうであり今の一族にはあまり関係ないし……これからどうするかとか考えた方が……ひっ！」

語尾がしゃくりみたいになっているのは正造がブチ切れ寸前になっていたからだ。

「ほうほう……いつからお前はそんな偉そうな口を叩くようになったかのう。そういう偉そうな口を叩くガキはしっかりお仕置きせないかんのお……」

ぶち殺し確定とばかりに、顔を真っ赤に染める正造に護はとっさに正座して、どげざ態勢に突入する。

「ごめんなさい！十分反省して2度と同じことを繰り返しませんから、頼むから僕に祖父ちゃんの『攻撃術』を向けないで！ちよつと前にも父さんにブツ飛ばされて死にかけたのに……」

「それは貴様の怠慢が原因だろうが！前日にさんざん言われつつたのに、よりもよって次の日の儀式で寝坊しおって……」「いや、普通寝坊したからって風の氏神の力を使って、50メートルも吹っ飛ばす親なんかないって……」

「また、口答えするきかの？……」本気で『術』を使おうとし

ている正造を見てさすがにやばいと感じたのか、もうダツシュで逃走を始まる護。

「わしが逃がすとおもつてるのか！いでよ『建雷命の矢』！」正造が叫ぶと同時に空中に無数の電気を帯びた矢が出現する。

「ええええええ！ちよつとやりすぎだつて祖父ちゃん！こんなまともに喰らつたら大けがどころじゃすまない・・・ぎゃああああああ！！」庭の方に逃げていた護にむかつて一斉に矢が襲い掛かり、断末魔の叫びが響き渡る。

そこから少し奥まったところにある今では、護の妹、古門美希と母親、古門静が表から聞こえてくる爆発音を聞きながら、ゆつたりとお茶を飲んでいた。

「おにいちゃん、また吹っ飛ばされたんじゃない？」

「そうね・・・こりゃあ後で治癒の術式を使わなきゃならないわね・・・こうしよつちゆう力を使う、バテてしまうわ。」

「仕方ないじゃない。お兄ちゃんは全くと言っていいほど『防御術式』が使えないんだから。長男のくせに。」

「もともと父さんもお爺ちゃんもスパルタだけど、私が『癒し手』だからといって遠慮なしでやりすぎじゃないかしらね。」

「でも、お兄ちゃんが今のままじゃいけないんでしょう。なにしろお兄ちゃんは・・・」「ええ、護には一族でまれな『神宝使い』としての素質があるからね。」

『神宝』とは護り屋の一族がはるか昔に神から与えられた宝のことで、『神宝使い』とはそれを自在に使いこなす人のことをさす。神宝使いはごくまれな素質をもったものしか扱えないというのは、護り屋の者にとっては常識である。

「たしか、誰にも抜けなかった家の『神宝』をお兄ちゃんが軽く抜

「いて見せたんでしょ。」

「そうそう。それで家じゅう蜂の巣をつついたような大騒ぎになって。それ以来、父さんとお爺ちゃんによるスパルタ訓練が続いてるのよ。いまではあの子も『攻撃』に関してはかなりの力を使いこなせるようになってる。でも『防御』がね。」

「だから、事件のときには私がお兄ちゃんのサポートをしてるんだよね。」

「そうね、あなたは防御の術式に長けているからね。これからも頼むわよ。」

そんな和やかな会話が交わされているとはつゆ知らず、護は次々と放たれる雷の矢から必死に逃げ回っていた。

「ふうふうぜえぜえ……冗談じゃないよ……いくらスパルタだって言ってもあれはないだろ……まあ、お陰で逃げることは得意になったけど。」護は『建雷命の矢』で攻撃された後、なんとかその射程からのがれ家の近くの河川敷まで逃げてきていた。「さすがに、外で不可視の術式を使わずに術ぶつ放すことはないだろうし……まあ、ここまで逃げれば大丈夫だろうな。」一息ついた護は河川敷の上に座り込む。

この場所には芝生が引かれていて座るのにはもってこいなのだ、この河川敷は大きな広場になっており

『第一公園』などと呼ばれているが、実質広場である。

「この川の近くにベンチが置いてあるのは気が利いてるな。ここから景色をボーッと眺めるのが好きな僕にとっては最高のロケーションだ。」目の前に川が広がるベンチに座りながら護は家族のことを考えていた。

「祖父ちゃんは、一族最強の術者。まあ、最近は体力弱ってるから『靈器』は使ってないけど。父さんは術式の技術は普通だけであら

ゆる『靈器』を使いこなすスペシャリスト。母さんは一族でもまれな強力な『癒し手』。美希はまだ半人前だけど『防御術式』に長けている。ばあちゃんは、今は実家で寝たきりだけど。あの人もすごかったな。なにしろ一族最後の『神獣使い』だったんだから。」

護は昔、実際に祖母である『古門みさえ』が神獣を呼び出すところを見たことがある。村を襲っていた強大な化け物『ヤマタノオロチ』。日本神話に登場する、神話の中でも著名な化け物。それが復活した時、みさえは、おのれの力によつて神龍『オカミノカミ』を呼び出し、その強力な水をつかさどる神龍をもつて一撃でヤマタノオロチを打ち滅ぼした。

「よつするに、うちの家族はだれしもがすごい人なんだけどさ・・・。ぼくは例外なんだよね。なにしろ『防御術式』を使えないんだから。」護り屋として一人前と認められるには『攻撃術式』と『防御術式』をバランスよく使えることが条件とされる。だが、護の場合『攻撃術式』『靈器による攻撃』は得意。つまり特化しているのだが。それと比較して『防御術式』が全く使えないのだ。ある程度なら『靈器による攻撃』を利用して押し返せば済むのだが、『護り屋』の敵はそう甘くない。

「だから、祖父ちゃんと父さんはスパルタ訓練してるんだけど・・・。僕に『神器使い』の素質があるっていつても持たせてもらえるのはまだまだ先だろうな。」

はあとため息をつき、川を眺める護。その眼に奇怪なものが映った。

「ん？女の子？」護の座っているベンチから10メートルほどはな

れた川岸に女の子がたおれている。

「やばい！まじで水難事故？119番を……えい！くそ、家を飛び出してきたからケイタイ持ってなかった！」悪態をつきながら護は川岸に降りる階段をフルダッシュで降り、女の子のもとに向かう。

「おい！君！しっかりしろ大丈夫か？返事をしろ！」肩を揺すってみるものの反応なし。完全に意識を失っている。

「たしか、こういうときは心臓の音を確かめて……つつ！」護の言葉の最後が舌打ちになってるのは『心臓音』がしなかったからだ。

「やばいやばいやばい！とりあえず誰かに助けを……つつてなんでこんな日に限って河川敷に人がいないんだよ！」全く不運なことに河川敷には護以外人はいなかった。

時間がもう夕方だったこともあるかもしれないが、『心臓停止した女の子』の処置など

護1人でできるはずがない。

「くそ！ここに『癒し手』の母さんがいてくれれば。なんとかなるかもしれないのに！」

だがここから家までは近いといっても15分はかかる、それまでこの女の子が持つかわからない。

「まずい……くそ、どうしたらいいんだよ！？」頭を抱える護。もう少し真面目に保健の授業聞いとけばよかったなどというくだらない考えまで現れる始末で、頭の中はあっという間にパンク寸前になる。その時だった。

「うつ……」女の子の口から声が漏れた。

「生きてる！意識が戻ったのか?!」

あわてて駆け寄る護。確かに女の子はうつすらと目を開けはじめている。

「ふう・・・良かった。でも、まさか死後硬直とかいう奴じゃないよな？」

念の為もう一度、女の子の胸に耳を当ててみる護は凍りついた。

「心臓の音がしない・・・じゃあやっぱり死んでるのか？」

信じられなくて、何度も心臓音をたしかえる護。だが、何度やっても結果はおなじだ。

「くそ！動けよ・・・動け！！」

護は無我夢中になって心臓のある部分を押した。

「苦しい・・・」

突然、女の子の口から意味のある言葉が飛び出した。

「えっ・・・嘘だろう・・・生き返った！？おい、大丈夫か？」

「あなたは？・・・」

「僕の名前は古門護。君の名前は？」

「私はクリス・エバーフレイヤ。それより、あなた古門っていたよね。もしかして『護り屋』の？」「え・・・うん、そうだけど。なんで君が『護り屋』を知ってるの？」

護の疑問の声を無視してクリスは護の手を握った。

「お願い、助けて。私はあいつらに捕まるわけにはいかない。捕まったら2度とここに来られない。」「ちよっ・・・まってよ、あいつらってなに？！」

先ほどまでは混乱していて確かめる余裕すらなかったが、近くで改めてみると、なかなかの美少女だ。年のころは16歳ぐらい。金髪、碧眼なのだが身長は護と同じぐらい。体つきは女の子らしくすらっとしており出ているところは出て、引っ込むところは引っ

込んでいる。つまり女性として理想的な体つきをしている。そんな女の子に手を握られて心臓爆発寸前の護なのだが、クリスの目は真剣だ。

「『深き者ども』私がかつて従えていたクテュルフの歩兵たちよ。今の私は力が封じられて戦えない。ここなら、そう簡単にクテュルフの支配も及ばない。だから逃げてきたの。おねがい私を助けて！」
「クテュルフ？深き者ども？良く分からないけど、そいつらは、もしかして『人ならざる者』？」

「そうよ、『人』ではないわ。私のような『亜神』の命令で動く『人ならざる者』たちよ。」

クリスの言葉に護は眼を剥いた。

「じゃあ……君は……」

「そう、私は人じゃない。旧支配者にて深淵の支配者。水をつかさどる神『クテュルフ』の眷族であり、それを信仰する『深き者ども』をしたがえる女神、それが私。」

いったいそれはどういとうと護は聞こうとしたのだが、言えなかった。

なぜなら、その答えと言える光景が目の前に突如広がったからだ。

「うそだろ……。なんなんだよこいつら！」目の前の川から次々と上がってきた

化け物たち、2足歩行のカエルのような形相の怪人は護とクリスを交互に見て、ゆっくりと口を開いた。

「ハヤク、クテュルフサマノモトニモドツテクダサイ。キヨヒサレルノナラバ、カツテノシドウシャデアルアナタデモヨウシャハシマセン。」

なんかアニメに登場する典型的ロボットのしゃべり方だがそんなことに気をまわしてはいられない。

「あれが『深き者ども』よ。かれらは水辺での鬪いに長けている。それに水属性の技にも優れてる。はやく岸边から離れて！」

『深き者ども』たちは、余裕を感じているのかゆっくりと近づいてくる。

「くそ！こうなったら仕方ない。おい！クリスって言ったっけ？お前の頼みはわかった。後で事情をゆっくり聞いてやる。」護は空中に手を伸ばし何かをつかみ取るしぐさをする

『この地に宿る氏神よ、汝が名によつて、この場を戦地とすることを許したまえ。汝が力をもつてしてわが手に力を授けたまえ！』護の言葉にこたえるかのように突如護の手の中に真っ黒な弓が現れる。

「それは？・・・」破魔弓。一般の家庭では正月の飾り物なんかに使われているやつだよ。でも氏神の多くはそれぞれの破魔弓を持っていくのさ。まあ、日本神道系の氏神に限られるけど。「護は破魔矢をくるくると上で回し、ピタッと正面に向けて構え弦を引く。

「やつらが本当に人ならざる者だつてんなら。これでダメージを与えられる。」次の瞬間、信仁の指が弦から離れ、弦が音を立てるのと同時に炎に包まれた矢が放たれ、『深き者ども』のうちの一匹の腹につきささる。

「グギャアアアアアアアアアアアア！」すさまじい断末魔と共に燃え上がる仲間を見て

他の『深き者ども』はじりじりと後ずさる。

「彼女から話を聞かなきゃいけないんだ。だから、ここで彼女を取り戻させるわけにはいかない。」護の手が再び弦に触れる。

「だから、悪い。本来は君たちの方も守るのが僕らの仕事なんだけ

ど……」

護の手が弦を引く「悪いけど、ここで追い払わせてもらおうよ。」護の手が弦から離れ
再び火の矢が放たれる。

「ナニヲシテイル！ヒルムナ、アイテハヒトリダ！イツキニタオセ
！」リーダーらしき

『深き者ども』の指示が飛び、飛びかかる彼らを護は間一髪でよける。

「なめるなよ、化け物。ぼくはこれでも一族で最も『攻撃術』に特
化した男だぞ！」

護の手が再び弦に触れる。

「力を上乗せすれば、こんなこともできる……名づけて『流星炎
群』！」引き絞った弦から放たれたのは、巨大な炎の矢。

「オチツケ！アレニシュウチュウシテ、ジュツツツカエ！」深き者
どもは一斉に何かの呪文を唱えた。すると空中に無数の水で構成さ
れた剣が現れた。

その剣は集まって、一つの巨大な大剣となる。

「ソノヤモロトモ。フンサイシテクレル！」高らかに宣言したリー
ダーは直後に護の口元が歪んでいることに気づく。そう護は笑って
いたのだ。

「僕がなんで『流星群』をもじった名をこの技に付けたのか理解で
きなかった？」その直後、空中を進んでいた巨大な炎の矢が突如分
裂した。

「流星群の名称を付けたのは『分裂』を意味させたかったからさ。
いくら頑張って

防御しても……」分裂した炎の矢は一斉に彼らに降り注ぐ「1万

の炎の矢は防げない。」
次の瞬間、深き者どものいた場所はとてつもない光と爆風に包まれた。

「すごい……これが『護り屋』のちから……」クリスは目の前で繰り広げられる闘いを呆然として見つめていた。

彼女が日本に逃げてきたのは『クテュルフ』が直接入ってきた地域だというのが理由だった。だが、目の前の少年の強さを見て、いろんな意味でここに逃げて正解だったと思うクリスだった。

「終わったよ。大丈夫だった？」『深き者ども』を全滅させた護は、クリスが逃げていた河川敷の真ん中まで戻ってきた。

「あの……あれだけ派手にやったのに。周りが騒がしくないのはどうして？」クリスの素朴な疑問に、護は自らが手にする破魔矢を前に出す。

「さつき、これを手にする前に唱えただろう？『汝が名によって、この場を戦地にすることを許したまえ』って。あれによって氏神の力である場所は『不可視の場』つまり普通の人間には見えない場所となったんだ。だから誰も僕が闘っていたことに気づかない。」

「すごい！人なのにそんなことできるのね。」素直に驚くクリスに護は当たり前のように首を振る。「家の奴ならだれでも使えるさ。別に自慢することじゃない。」

「それより、くわしく聴かせてくれよ。何のためにここまで逃げてきたかを。」

「わかった……私は……って危ない！」突然クリスが叫んだ警告にあわてて後ろを振り返る護。その眼に映ったのはさつき『深き者ども』が作り上げた大剣が制御を失って

地面に向かってまっさかさまに落ちてくる光景だった。

少年の目覚め

最初に目に入ったのは、真っ白な天井だった。

「う……ん……ここは?……」

護は寝たまま首を横に向けてみる。入り口が右にあり、観音開きのドアになっている。起き上がって、正面を見ると台座がありそこに古門家の『神器』が飾られている。

そこで初めて、ここが自分家にある『聖堂』だと気づいた。

「いったいどうして聖堂の中に……僕はあのとき……はっ! そうだ! あの女の子!」護は急いで聖堂のドアを開け放ち、おそらく家族がいるであろう居間に向かおうとしたのだが……
「ぐふうう!」突如全身に襲いかかった衝撃波に聖堂の中まで押し戻された。

「な、なんだ?……おそろおそろ扉の陰から外をのぞく護。その目に映ったのは……」
「よかった……やっと起きたんだ……」
「……だめだってお兄ちゃん。まだダメージは残ってるんだから安静にしなきゃ。」

「美希?なんで涙浮かべながら兄を吹っ飛ばすんだよ?余計にダメージになるだろ!」
思わず怒鳴る護に美希は両眼に涙をの粒を浮かべながらも、睨めつけて反論した。

「私だつてしたくないよ!でもお兄ちゃんが勝手に家から飛び出したあげく大けがして帰ってきたから……父さんとじいちゃん直々に見張ってるってお達しなの。」
護は自分の手や足を眺める。目立った外傷などはない。というか全くと言っていいほどない。体

もどこかが痛むというわけでもない。そして目を覚ましたら聖堂にいたということは……

「母さん。昨日一晩中癒しの呪文唱えてたんだよ。おかげで今日はくたびれちゃってずっと寝てる。けっこうお兄ちゃんのダメージひどかったみたい。私もお兄ちゃん捜しにいったとき川辺で倒れてるお兄ちゃんみて……近づいたら息してないんだもん……どうなるかと思った……」涙を流す美希を見て、本気で心配させたことを悟った護は聖堂のドアの陰から少し顔を出して言った。

「謝るときぐらい、聖堂から出てもいいだろ？」美希はうなずき涙を拭いた。護は聖堂のドアから今度こそ出て、美希の方に向かう。美希は涙を隠そうとしているのか目をつぶっている。

「ほんとにお兄ちゃんは……防衛術式使えないのに、そのくせいろいろなことに自分から頭つつこんで……いままでは何とかなってたけど……今回はほんと危なかったんだから……きゃ！」美希は突然自分の体を襲った感触にとまどいの声を上げた。目を開けてみると護が両手で自分の体を抱いている。

「わわわわわわ……何するのよ！」

「悪かった。心配させて……誓うよ、もう2度と美希に心配はかけない。今回で相棒がいないとどんなに危険か身にしてみte感じたから。」護は美希の方をまっすぐ見つめた。「ごめん……」
聖堂の庭を風が駆け抜け、庭の桜の花が宙を舞う。

「いいよ……でも約束して、戦うときは相棒と一緒に行動することを。」美希の言葉に護はうなずく。「ああ約束する。僕の魂に刻む。2度と相棒なしで挑まない。」美希はふつとほほえむと護の手を振り払った。

「いやあ……よかった、許してもらえて……ていうか我ながら恥ずかしこと言っちゃったな……ってあれ？美希どう

したの?」目の前で真っ赤になりながら

うつむく美希に心配そうに近づくと、護に、美希の怒りが爆発する。

「いくら兄妹だからといって……年頃の女の子にむやみに抱きつくな!」美希の剣幕に押されて、少しづつ後ろに引く護をにらめつけた美希は空中に手をのばす「きたれ『天狗のうちわ』!」美希の叫びとともにどこからともなく風に運ばれてきたかのように真っ赤な羽毛のうちわが飛んできて、美希の手に収まる。

「次同じことをしたら、これで吹き飛ばすよ!」どうやら美希の女のプライドをひどく傷つけてしまったようなので、護はおとなしく聖堂の中に戻ることにした。昔は問題や悩みがあるとすぐに泣き出す美希をいつもこんな感じで慰めていたが、さすがに美希も今年で中学2年生、恥じらいを覚える年頃の少女にさすがにまずかったと反省する護だった。

「ところでお兄ちゃん。お兄ちゃんが倒れてることを伝えてくれたあの子は誰なの?」

ドアを開けて中に入ろうとしていた護はグルンとすごい勢いで首を回して美希の方に向き直る。

「その子って……金髪碧眼の外国人少女?」護に勢いよく問いかけられ若干引きながらも美希はうなずいた。「その子。今居間で父さんとじいちゃんから事情を聞かされてるよ。本人はお兄ちゃんが起きてから、すべて話すと行ってたけど。」

「あのさ……」護は深い深いため息をつく。「それなら、俺が起きたこと、祖父ちゃんや父さんに報告しなきゃいけないんじゃないの?」

「……」「……」「……ごめん。かつかしすぎて忘れてた。いま呼んでくるね!」明らかに赤面しながら照れ隠しなのか、語尾をわざと大きくし、

走り去っていく美希。その後ろ姿をみながら

（ああいうところは昔と変わってないよな・・・）と昔に思いをはせる護。この家は、

家というより神社、屋敷と形容した方が正しい規模を持っているので、美希が祖父たちを連れてくるのには少し時間がかかる。

その間、おとなしく『聖堂』の中で待っていていようと思った護だったのだが、

「あれ？・・・良かった回復したんだ！」背後から聞こえた、聞き覚えのある声に

思わずビツクと全身を硬直させてしまった。

「あの・・・大丈夫？・・・もしかしてまだダメージが？」恐る恐る後ろを振り返る護。その眼に映るのは、金髪ナイスバディの外国人美少女・・・つまり

護が死にかけになりながらも守った少女『クリス・エバーフレイヤ』である。

「いやいやいや、大丈夫だよ！全然問題ないから！・・・って心配なのはわかったから、できれば勝手に人の体あちこち触らないでもらえるかな！」女の子の手でまさぐられて

真っ赤になっている護に気づき、ようやく手を離すクリス。

「でさ・・・なんでこんなところに？祖父ちゃんや父さんと話していたんじゃないの？」

「うーん・・・貴方が起きてから話すと言い張っていたら『まあしかたないからやつが起きるまで庭でも散歩したらどうだ』と言われたので、その通り庭を散策させてもらったの。」

どうやら、あの頑固者の祖父にこう言わせたほどだから、彼女はかなり意地を張っていたらしい。おそらくこの後に待ち受けるである

う『説教と質問』という拷問タイムを想像して思わず身を震わせる護。

「あの・・・やっぱりダメージがあるんじゃない？」心配そうに見てくるクリスに、

（どちらかといえば、精神的なダメージがありまくりで死んじゃないそうだよ・・・）

と内申愚痴る護だったが、いまは、それどころではない。

「あのさ・・・妹の話や君の話を総合すると、じいちゃんや父さんの前で、僕が起きてから話すって言ったことだけど・・・どうして？」

「あなたしか見てなかったから。」「なにをさ？」「私を追ってきた『深き者ども』よ。」

あの時、川から次々と現れた異形の怪物。カエル人間としか呼べないような外見をしているやつらは水を操る力を使って護に重傷を負わせた。

「あなたの戦いぶりを見る限り、あなたたちの一族も、私達がいる『裏側』の世界に参与していると思うけど、それでも私たちの存在は異質すぎるの。だから貴方の証言がなければ信じてもらえそうにないと思って、あなたが起きるのを待ってたの。」

「うーん・・・色々話理解できないから、整理させて。まず『深き者ども』ってのについて説明してくれない？」

「『深き者ども』は、深淵の支配者にして、この地球の旧支配者とされる神『クテュルフ』に仕える人間の変異体たちのこと。」

次々と飛び出してくる大量の専門用語に余計に訳が分からなくなり、

おもわず頭を抱える護。さらにそこへ追い打ちをかけるかのように、本日3度目のデンジャラスイベントが降りかかってきた。

「古門家次期当主ともあろう者が、おなごといちゃつくとは何事じや！」地面が揺れたと錯覚してしまいそんな怒声と共に護に向かつて、黄金の光が飛んできた。

間一髪で、雷の矢を避け、地面に突き刺さった矢を見る護の顔が驚愕で染められる。

「これは・・・『建雷命たけみかずちの矢』？じゃあ、まさか・・・」驚きの目で矢が放たれた方向を見つめる護。その先にいるのは・・・

「さあて・・・たつぷり仕置きをせねばならんの護。」「一族最強の術者であり。前古門家当主でもある護の祖父『古門正造』は再び護に狙いを定める、」「さあて・・・いつまでもつかの？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1605p/>

クテュルフ神話と少女と剣

2010年12月31日23時29分発行